石狩市の日本遺産
構成文化財

石狩市では、旧長野商店、古潭神社の神輿、金大亭、厚田神社の船絵馬の４点が構成文化財として、平成30年５月24日に認定された。

旧 長野商店

北前船で財をなした新潟県出身の長野徳太郎が、明治７年（1874年）に親船町で創業し、米、塩、呉服、反物販売のほか、酒造を営んだ石狩を代表する商店の一つ。

現在保存されている店舗と蔵は、木造の骨組みの外側に920個あまりの軟石が積まれた耐火性の高い木骨石造の工法で、瓦屋根や卯建と洋風のアーチ窓という和洋折衷の特徴を持つ。

正面の「千歳」という酒の看板には、「堺」という地名が書かれている。北前船の積荷として運ばれた「堺酒」は、夏まで変質しない高級酒として人気があったという。

☎　0133-62-3711
石狩市弁天町３０－４
いしかり砂丘の風資料館
付属施設　休館火曜日
共通入館料　大人300円

古潭神社の神輿

明治13年(1880年）に、押琴湾に大嵐の波風が押し寄せ、停泊していた北前船の多くが被害にあった。この時に何の損害も受けずにすんだ久吉丸の船主が「神仏の加護である」と喜び、翌年大阪から神輿を積んできて奉納した。

自然と向き合う北前船の危険な面と船主の信仰を伝えるストーリーである。

押琴湾の絵図　本陣や弁天社の位置がわかる

☎　0133-78-2417
住所　石狩市厚田区古潭
連絡先　厚田神社に同じ
通常非公開

金大亭

明治13年（1880年）に、新潟出身の石黒サカにより創業された料亭。石狩鍋を考案した店として知られている。

創業時の建物が現在もそのままに残されていて、北前船主らでにぎわった時代の雰囲気をしのぶことができる。

☎　0133-62-3011
石狩市新町１
石狩鍋を含む鮭鱒料理コース。完全予約制。

厚田神社の船絵馬

厚田神社の境内に、明治24(1891年）年に５万石という未曽有の豊漁があったことを記した「豊漁記念碑」が残されている。５万石の鰊粕の生産に要する生鰊は約４万トン。販売価格は現在の金額で約50億円になる。この碑文は、鰊の大漁獲地であった石狩湾・厚田に、多くの北前船が来航した理由を伝えている。

明治中期に奉納された厚田神社の船絵馬は、北前船と鰊漁で繁栄した厚田の様子を今日に伝える貴重な資料である。

☎　0133-78-2417
石狩市厚田区厚田１番地
例祭日 祝日「海の日」の前日
通常　非公開

北前船と鰊漁場を学ぶ市内施設

石狩市と北前船の結びつきを知る大切な手掛かりは、鰊漁場と買い積み。次の施設でじっくり学ぼう。

道の駅石狩「あいろーど厚田」

石狩市はまます郷土資料館

鰊番屋として明治42年(1909年）に建設された白鳥番屋を活用。

鰊場のジオラマと、実際に使用された漁具が展示されている。和洋折衷の建築様式は必見。

☎　0133-79-2402
石狩市浜益区浜益77番地１
入館料300円　休館火曜日
冬期休館　要開館日事前確認
サテライト「カフェ・ガル」も見学を

道の駅石狩「あいろーど厚田」

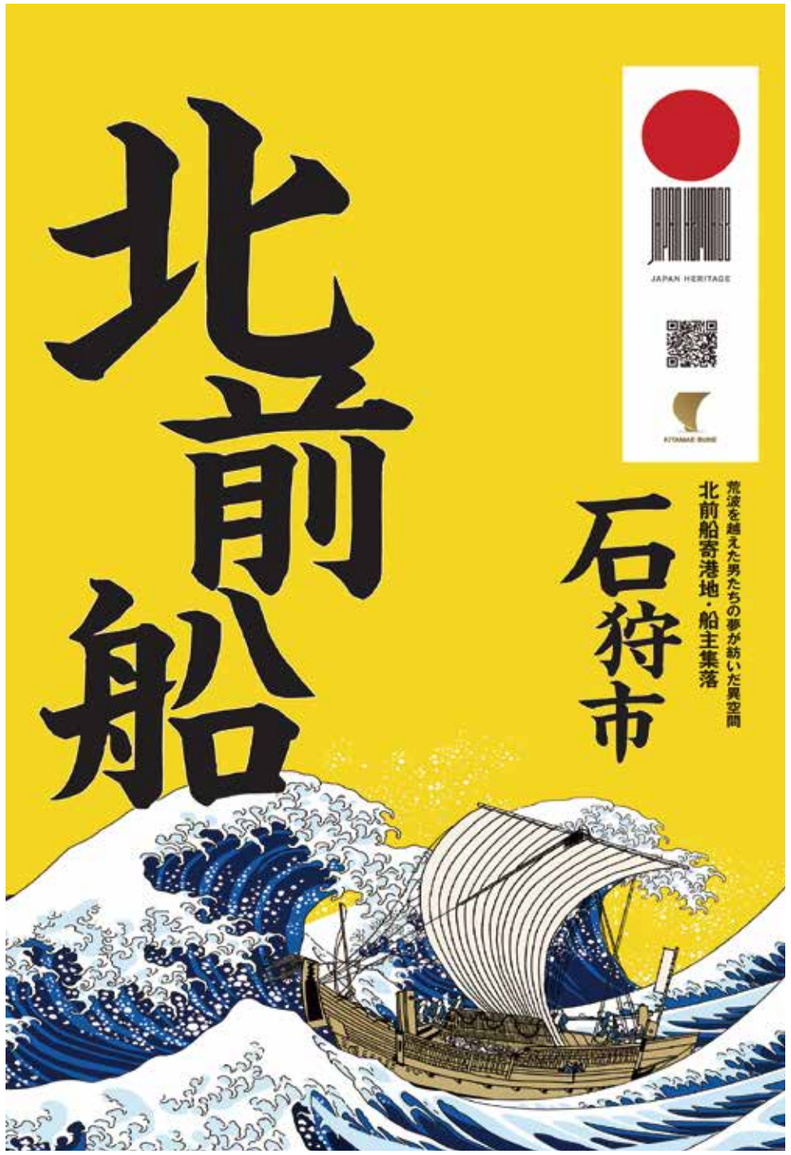
地域の歴史、文化情報の発信を担うため、上写真の「北前船と鰊漁場」をテーマとするジオラマを展示した。寺谷家文書等も保管している。

☎　0133-78-2300
石狩市厚田区厚田98-2
無休　開館状態月により変化
資料室入場無料

私設資料館石狩尚古社

俳句結社の資料館として有名だが、佐渡出身の中島商店の蔵に保管されていた北前船由来の陶磁器や漆器、その他由緒ある資料が豊富に公開されている。

☎　0133-62-3380
石狩市本町西３
来訪者時開館　入館無料
館主・中島勝久氏に確認を



石狩市
北前船寄港地
船主集落として
日本遺産に

「日本遺産（Japan Heritage)」は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定する事業。

「北前船寄港地・船主集落」は、北前船の寄港地を一体的にとらえ、港町同士の文化交流や、大きな富を生んだ北前船のストーリーを示した日本遺産として、石狩市を含む全国の38市町が認定された。

石狩は、認定された寄港地の最北にある北前船の重要な目的地だった。

石狩と北前船の結びつきを探っていこう。

伝馬船

発行　石狩市企画経済部商工労働観光課
TEL：0133-72-3167　FAX：0133-72-3540
Mail：kankou@city.ishikari.hokkaido.jp
編集　石狩市郷土研究会　資料提供　あいかぜ工房

毎年、たくさんの北前船が石狩・厚田にやってきたのは　なぜか。

八田美津さんの人形を生かした連作のジオラマが、石狩はまます郷土資料館と道の駅石狩「あいろーど厚田」に展示されている。写真を通して、この疑問の答えを探っていこう。

人々が待ちわびた宝船「下り荷」が生活を支えた

人口が激増したにもかかわらず、米が明治中期まで生産できなかった北海道では、食料をはじめとするあらゆる生活必需品を北前船に依存していた。

人々は宝船を待つように、北前船の来航を待ったと記録に残されている。

北前船は賃送目的の輸送船ではなく、船主が寄港地で特産物を購入し、別の寄港地で販売することをくり返し、価格差で利益を得る買い積みを行う商船だった。

日本海を北上して運ばれた荷物を「下り荷」という。岬手前の浜に、何が陸揚げされたか調べて見よう。

買い積みをくり返し、最後に米を仕入れたのは、越後や庄内だった。

全国から運ばれた食品。
鹿児島の黒糖や尾道の酢、佐渡の味噌と醤油。

米がとれない時代は、酒も北前船に頼っていた。堺酒、越後酒、大山酒が運ばれたと記録にある。

北前船は文化も運んだ。古潭には文久２年の獅子頭。望来獅子舞も後に富山から伝わった。

長栄丸の船主佐藤松太郎が、日本海の荒海を乗り越えて、下り荷を運びきった船頭の西野平助を、浜に出迎えてねぎらっている。

北前船が競って買い付けた「上り荷」の鰊粕とは何か

汲み船が岸に着くと、沖揚げが始まる。

「下り荷」よりもさらに大きな利益を上げることができた「上り荷」。北前船は競って鰊粕を買い付けるため大産地の石狩・厚田を目指した。

鰊粕の役割は次のどれ？

A かまぼこの原料
B 動物のえさ
C 畑の肥料

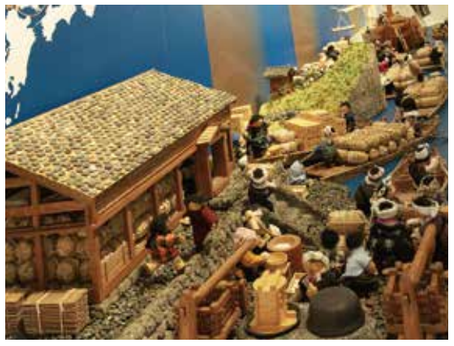
答えは下の枠内の説明で。

休む間もなくもっこで運び、

大釜でゆで、

角胴で、水分と油を搾り取る。

角胴から外し乾かしたかたまりを切り砕いて俵に詰める。



→鰊粕の出荷が、明治期の北海道経済を支えていた。
貴重すぎて「魚に非ず」と書いて、「鯡・にしん」と呼んだ。

運ばれた鰊粕の役割は？

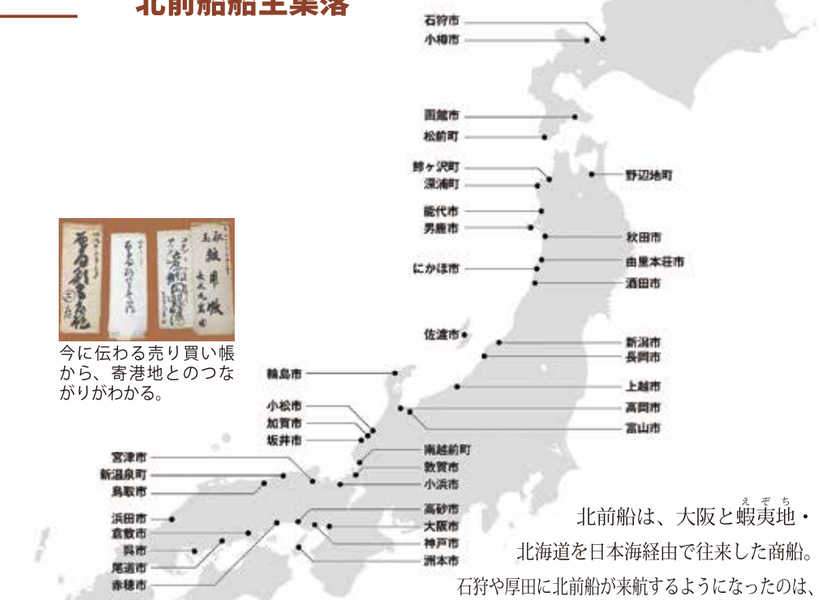
鰊粕は綿花の生産に欠かすことができない肥料として畿内や瀬戸内まで運ばれ、高い価格で取り引きされた。

木綿が広まったのは江戸時代初期で、それまでの庶民の衣服は、麻か樹木からとった繊維だった。温かく強く、柔らかい木綿を日本中の人々が求めた。綿花の生産には大量の動物性の肥料が不可欠で、鰊粕は干鰯に代わるかけがえのない肥料であり、生糸（絹）の桑、藍や菜種、楮、果樹の肥料としても需要は増え続けた。

明治の富国強兵を輸出によって実現した繊維産業の土台となったのが、肥料としての鰊粕だった。明治時代、鰊の約９割は鰊粕と胴鰊という肥料に加工され、身欠鰊など加工に手間がかかる食料としての利用は意外なことにわずかだった。

北前船文化として伝わる裂織も木綿を利用

日本遺産に認定された 38 市町の北前船船主集落



今に伝わる売り買い帳から、寄港地とのつながりがわかる。

北前船は、大阪と蝦夷地・北海道を日本海経由で往来した商船。

石狩や厚田に北前船が来航するようになったのは、幕府の蝦夷地再直轄後の石狩改革によって、直轄が認められた安政５年以降で、最盛期は明治時代だった。

ジオラマの舞台は厚田古潭の押琴湾。時代は佐藤松太郎が加賀の寺谷家と長栄丸の共同運航を始めた明治 25 年（1892 年）。

日本海の荒波を乗り越えた北前船

北前船運航は今の金額で、一航海あたり１億円。利益率 10 割といわれた大きな収益が期待できるかわりに、海難による損失や破産の可能性が避けられない投機的な経営だった。

安全と効率を追求して発達した北前船独自の機能にも注目したい。

人形制作
八田美津
（人形作家・石狩市浜益区在住）
北前船・情景制作
石黒隆一・美香子
（あいかぜ工房　www.aikaze.net）